

連載 千座の置き戸（ちくらのおきど）

第二百八十五回 貨幣制度の話 その六

南出喜久治（令和8年2月1日記す）

かてともの たみがすべてを つくりだす かねはこれらの あはせかがみよ
（食料と商品、民が全てを作り出す、通貨はこれらの合はせ鏡よ）

山口薫が提唱した「公共貨幣」といふのは、どういふものか。

前にも説明したが、山口は、政府貨幣を公共貨幣と命名し、それ以外の民間貨幣を債務貨幣と呼んでゐる。

公共性があるといふことは、通貨であることを意味するので、FRBが発行するドル札も日本銀行が発行する日本銀行券も法律で定められた法貨としての通貨であるから、これも公共貨幣であるから、公共貨幣といふ命名ではなく、これを債務貨幣と呼ぶことは混乱を招くことになる。

私は、山口が、平成27年に、「公共貨幣 政府債務をゼロにする「現代版シカゴプラン」」が上梓されて、これを読んでいたが、大いなる違和感があつた。

そもそも、公共貨幣の対立概念として債務貨幣といふ命名も矛盾したものである。貨幣は、民間銀行が国民に対して貸付によつて発生するので、債務貨幣と呼ぶのであるが、国民が自ら生み出した価値物（財、サービス）は、決して債務ではない。

民間銀行から借金をしたとき、貨幣の授受を伴わずに借用証書を交付し、それが預金通帳に記載されることによつて債務貨幣が生まれ、それを返済することによつて債務貨幣が消滅するといふ。人の暮らしは、借り入れから始まるのではない。日々の営みによつて価値を生産することから始まるのであつて、借金から始まるものではない。

しかも、前にも言つたが、山口は、その債務貨幣が消滅することが経済を停滞化させるとし、しかも、債務貨幣は利息を伴ふために、利息が利息を生み、その債務返済のために国民は働かざるを得ないといふことを主張し、現金としての貨幣は、銀行から引き出されて、その後に銀行に預金されるまでの過渡的なものであるとする主張をしてゐるが、このやうな組み立ては極めて矛盾してをり、明らかに破綻した理論である。

借入金を返済して債務貨幣が消滅することがどうして経済の停滞を招くのかも解らない。貨幣を介さない取引も存在する。贈答的交換といふものもある。何かを貰ったら、後で別の物でお返しするといふ時間差の物々交換もある。さういふ貨幣を介在しないものが世の中の潤ひとなつて世の中を良くするのである。

また、利息の存在が貧富の差を生むとするが、貧富の差が生まれる格差社会は、ピケティが説くやうに、「 $r > g$ 」、つまり資本収益率 (r) が経済成長率 (g) よりも常に大きいことが歴史的に証明された結果であつて、利息の有無によるものではない。

つまり、資産（不動産その他の金融資産）を持つて資産運用する者の所得は、労働によつて得られる所得よりも常に大きいので、富裕層はより裕福になり、貧困層との格差が広がるからである。

山口の理論は、働くことを苦痛と捉へるキリスト教思想に過ぎず、債務貨幣が公共貨幣に変更されたからと言つて、利息がなくなることはなく、人々が労働から解放されることはないのである。

利息を廃止すべきであるとか、マイナス金利を導入するとの考へはあるが、それは究極において賭博経済の制限において語られる理論なのである。

また、山口は、公共貨幣に仮想通貨（暗号資産、トークン）を導入することを提唱するが、これによると、貨幣発行額の増減変動を正確に反映する政府の貨幣発行権の行使を否定し、独り歩きさせることになつて、そのままでは公共貨幣の概念と明らかに矛盾することになるのである。